海外の話題

「ルールを作る」英国人

農林中央金庫　ロンドン支店長　大石　稔

これまでの寄稿では英国の欧州連合（EU）離脱、いわゆる BREXIT の現状をレポートしてきたが、2019 年 12 月の総選挙が保守党大勝利に終わり、離脱法案もすでに議会を通過。1 月末の離脱が明確になったこともあり、今回は話題を変えてこの問題の背景とも考えられる英国人のメンタリティについて書いてみたい。

一連の BREXIT を巡る動きの中で理解に苦しむのは、「国内を大混乱させてまでなぜ離脱したがるのか？」ということだ。これについて「英国人は自分でルールを作れず EU に押し付けられるのが我慢できない」とよく言われるが、確かに英国人は「ルールを作る」ことに長けた国民だと言える。

例としてルール無くしては成立しないスポーツを考えてみると、英国は多くのスポーツの発祥の地となっている。サッカーは英国で行われていた原始的な競技を、協会を設立しルールを整備したことが現代サッカーの始まりとされている。また、W杯で盛り上がったラグビー。パブリックスクールの一つラグビー校で生徒がサッカーの試合中にボールを持って走ったことが始まりというのは有名な逸話である。他の競技と違い、その国の国籍を有しない選手が多く代表になれるのも、英国連邦内の他国に赴任・移住した英国人選手がその国の代表として参加できるようにルールを定めたものらしい。ゴルフもスコットランドのセント・アンドリュースにある Royal and Ancient Golf Club(R&A) が制定するルールが世界共通のものとなっている。あまり知られていないがバドミントンもアジアでこの球技を知った英国人がバドミントン村にある邸宅で紹介したことにより協会ができルールが定められたそうだ。その他では英国連邦でしかほとんどやられていないクリケットもそうだし、ビリヤードの「スヌーカー」という競技やダーツも英国人がルールを作ったものとされている。スポーツの他にも様々な産業において認証基準等が英国で定められたものが多く存在する。このように英国人はルールを作り、それを標準化させることに多くの実績、長い歴史を有している。

この「ルールを作る人」というメンタリティがあるからこそ、英国人はEUが定めたルールを一方的に守れと強制されることが心底いやなのであり、いくら論理的に経済への悪影響を示したところで、この「支配されることへの本能的な嫌悪感」は覆せるものではない。余談だが英国人の愛唱歌の一つ「Rule Britannia」では、サビで「英国人は決して奴隷にはならない！」と高らかに全員が合唱するのである。

また、いかに英国人が大陸のルールに従うのが嫌いかという事例だが、大陸各国がローマ教皇の命によって 1582 年からグレゴリオ暦を採用したのに英国は従わず 1752 年までユリウス暦を採用し続け、その間元旦は 3 月 25 日（聖母マリア受胎告知の日）だったそうだ。実に 170 年に渡って違う暦を使用するという不便な状況を続けたということであり、かくの如く短期的な利益、利便性を犠牲にしてでも大陸欧州の言う事を聞きたくないというのは英国人のメンタリティの中に深く根付いているのであろう。

離脱後は移行期間に移るが、解決すべき課題が山積しており結局 EU と自由貿易協定（FTA）を結べず 2020 年末で合意無き離脱となるリスクもある。チャーチルが第 2 次大戦時に言った「Now this is not the end. It is not even the beginning of the end. But, it is, perhaps, the end of the beginning.」という言葉がまさに今の状況を言い表している。チャーチルはアフリカ戦線でドイツに勝利した際にこう言ったのだが、果たして今回は英国にとりハッピーエンドにつながるのであろうか？

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます